
もう1度、紅茶の味を。

寧祈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう1度、紅茶の味を。

【Nコード】

N7403A

【作者名】

寧祈

【あらすじ】

僕の為に紅茶を煎れてくれた少女。また、君の紅茶が飲みたい。

僕がコーヒーしか飲まなくなつて、2ヶ月がたった。2ヶ月前までは、今の僕には考えられない甘つたるい紅茶ばかり飲んでいたのだ。

2ヶ月の間に、紅茶の味をずいぶん忘れた。今日も、口にしたコーヒーが舌感覚を鈍らせる。紅茶って、どんな味だったかな…。

「先生、コーヒーしか飲まないんだもん。つままないよー」

そんな声が聞こえた気がして、僕は辺りを見回した。その声の主が部屋の中にいるはずも無く、僕はため息をついた。

2ヶ月。そう、2ヶ月前。それまでは、この部屋に2人の男女がいた。13歳の少女、未稚―みち―。そして僕、素直―もとなお―。実に彼女と僕の年齢差は10歳。それでも、未稚とは上手くやっていくつもりだった。のに、今ここには未稚がいない。そういえば、紅茶を飲まなくなったのも、未稚がいなくなつてから。まあ、紅茶を煎れてくれる人がいなくなつたんだから、当たり前と言えばそうなんだけれど…。

― 3年前、初夏 ―

その日、僕は平日だというのに公園にいる少女を見つけた。
「何してるの？」

声をかけると、その少女は
「きゃーっ！ 不審者ー!!」

…… 最悪の出会い方だった。

今の学校は、不審者対策が進んでいるなあ…と、感心させられたものだ。

「獲って食おう、なんて事しないよ。そう構えないで、ねっ」

「おじさん、変な人じゃないの？」

当時僕は20歳だったのだが…やはり小さい子から見ると、僕もおじさんなのだろうか。

「それにしても、おじさん変な格好。お医者さんみたい」

「ああ、これね」

僕は羽織っていた白衣を正した。

「僕はね、樹のお医者さんになりたいんだよ。まだ見習いだけど、これからもっと勉強して、いつか…」

「スゴイッ」

少女が目を輝かせていた。

「じゃあ、樹の先生だね。これから、おじさんの事先生って呼ぶ」
少女の名前は未稚。僕を『先生』と呼び、慕ってくれた少女だった。

翌日も、未稚は公園にいた。

「未稚ちゃん」

「あっ、先生ーっ」

「……今日もここにいるんだね」

「うん、いつつもいるよ」

未稚はずいぶんと、学校に行っていない、不登校児の様だった。

「ねえ、先生」

「何？ 未稚ちゃん」

「学校って、どうして行かなきゃいけないの？」

未稚の大きな瞳が、僕を真摯に見つめていた。どうしてだろう。考えた事も無かったな…。

「先生も、学校行かなきゃダメって怒る？」

学校に行かなきゃいけないなんて…理由なんてないのに。

「怒らない。僕は絶対怒らない」

未稚は、こういう少女なのだから。

「先生大好き」

未稚は、笑ってこう言ってくれた。

その日から、僕と未稚は毎日公園で会うようになった。

少しずつ少しずつ、大きくなる未稚。僕は優しく笑うその少女に、いつの間にか魅かれていた。

未稚もまた、心情の成長と共に、僕を『先生』ではなく、1人の『異性』として見る様になっていた。

しかし、未稚が成長すればするほど、不安も大きくなっていった。

そして、2ヶ月前―僕は家に来ていた未稚に言った。

「未稚、将来の事を考えた事はあるかい？」

「なあに、先生。いきなり」

未稚は紅茶を煎れながら振り向いた。

「せめて義務教育の過程は済ませないと、何も出来ないよ。そろそろ、学校に行く事も考えないと」

未稚は笑顔のままで、「そのうちね」と返した。

「未稚、学校に行くんだ」

いやに強い口調になったのが、自分でも分かった。

未稚は顔こそ笑顔を保っていたが、マグカップを持つ手が震えていた。中の紅茶が少しこぼれている。

「僕が、いつでも未稚のそばにいる訳にはいかないんだよ」

僕はそう言っ、未稚を残し、部屋から出て行った。自分から言い出したくせに、未稚がなんと返してくるか、それが怖かったのだ。その後しばらく、がたがたという、何かを動かす音が部屋でしていた。そして、ボタン、という大きな音を最後にして、音はそれっきりしなくなった。

部屋に戻ると未稚の姿は無かった。きれいに整頓された家具が、どこことなく哀しい雰囲気醸し出している。そして、何より1番目立つところ――キッチンテーブルの上に、未稚からの手紙が残されていた。

『先生へ　先生、学校に行かなくなつて怒らないって、あれ、ウソだったね。でも、先生は大好き』

たったそれだけの、短い手紙。女の子らしい丸まった字が、白い紙の上で踊っていた。未稚はどんな顔をして、この手紙を書いたのだろう。それを想像すると、目頭が熱くなった。

ねえ未稚。嘘をついた僕でも、未稚は大好きって言うてくれるんだね。嫌ってくれた方が、気が楽だったのに。あんな酷い事を言つた僕なんか、嫌ってくれたっていいんだよ、未稚。

未稚。あの手紙を受け取ってから2ヶ月。遅すぎるかもしれないけれど、手紙の言葉を信じてもいい？

君は素直だから、きつと無理してでも学校に通ってるんじゃないかな。だから、今日君のいる所まで――。

「未稚、大好き」

そう言う為に、会いに行くから――。

（後書き）

最後がぼんやりとした話になってしまった様な気がします。読んでくださった方からも、何か指導をもらえると嬉しいですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7403a/>

もう1度、紅茶の味を。

2010年10月10日02時24分発行